

## 19 世紀都市小説の原点

江頭 理江

### 1. 序

都市は小説世界の重要なテーマである。世界の文学を見渡した時、時代と場所の違いはあるものの、多くの作家が都市をテーマとして扱ってきたが、他の地域のものと比較すると、アメリカの都市小説は、都市への人の流入が急激であったために、異なる様相を示しているのではないだろうか。

Jacob Riis の *How the Other Half Lives* は、「19 世紀末ニューヨークの移民下層社会」という副題を持ち、縦割り長屋・テネメントの「悲惨」な現実が語られている。リースの書いたテネメントは、「家畜小屋へと続く通路と秘密の抜け道のある、家賃集金人だけが迷うことのないたくさんの裏通りでは、群衆が今にも壊れそうな構造をした小屋」(74)で、内容は「ルポ」としての形態を持っている。一方、Stephen Crane は小説の形で “Maggie; A Girl of the Streets” を書いたが、リースのルポに描かれる人々と、クレインが描く世界は、いずれもそこに住む者たちが容易にスラムから抜け出せなかった悲惨な現実を共通して表している。

### 2. クレインが見たもの

スティーブン・クレインの「マギー」は、当時アメリカに受容されていた自然主義文学の代表的作品である。「マギー」の小説世界では、「環境」の在り方に左右されるキャラクターたちの状況が描かれるが、それらをありのままに描くというよりも、作家自身の主張、強調したい部分が付加されていることが窺える。*Sister Carrie* と比べて、マギーをはじめキャラクターたちの思考や感情は、会話をのぞけばあまり挿入されておらず、情景や状況の描写が多く、リースのルポ描写の形に近い。マギーの住む長屋は、暗い階段を這うように登り、冷たく陰気な廊下を歩いて、ドアを開けた先に見える薄暗い部屋である。地を這いつくばって生きているような者たちにとって、空を見上げることのできる空間はほとんどない。マギーの視線を辿りマギーの見る世界を物語世界の中に映し出した時、ニューヨークという都会を象徴する摩天楼が映し出される気配は全くない。スラムの暮らしの惨めさと人々の怒りのみがある。物語の後半部、売春婦に身を落としたマギーが暗い通りに入り込むと、彼女の眼前にはただ死んだように淀んだ黒い川が広がっていた。高いビルがあり、ぎらぎらした光が照る中で、マギーが実際に会えるものは笑うと茶色い歯が灰色の髭の下から光る、死んだクラゲのように体を震わせる男なのである。しかも、彼らの足元の川の水も、黒く死んだ色をしている。

しかしながら、彼女たちが憧れる田園的風景が、小説世界にまったく描かれていないというわけではない。たとえば、成長して警察沙汰を起こす兄は、トラブルの中でふと星空を見上げて月を愛でるし、マギーが理想の恋人を想像するとき、牧歌的なイメージをもって思いを寄せる。

都市に対置される、田舎・農村という存在は、19 世紀後半の急激な都市化現象の中では、憧れの「場」、夢の「場」として捉えられる。ジミーやマギーの姿に牧歌的なものへの（無意識の）憧れを挿入したのは、クレインの意図的な仕業であり、都市社会下で、都市と牧歌的自然の「共存」という理想を抱きたいという思いがそこにある。アメリカ固有の「過去」・牧歌的自然へのあこがれは、アメリカの都市小説に、「現在」と「過去」という二つの時空が存在していることを意味する。

### 3. キャリーが見上げる現実

スラム生まれのマギーは、高いビルや摩天楼から下を見下ろすことは決してなかった。視線を下に向け、足元を見つめて生きてきた彼女にとって、空間はあまりにも平面的であった。一方 Theodore Dreiser の『シスターキャリー』の主人公、18 才の Caroline Meeber は 1889 年、ウィスコンシン州の田舎からシカゴへ列車で上京する。キャリーは途中でシカゴ川に浮かぶ巨大な帆船や煙を吐いてレールをきしませ走る列車を見て、世間の荒浪に飛び込もうとしている自らの状況に吐き気をおぼえる。滞在する姉のフラットは労働者や会社員家族の住宅地のアパートの 3 階の、通りを見下ろすところにある。マギーとは、出だしから異なっ

いる。キャリアが上京した当時のシカゴの発展は目覚ましいもので、キャリアの眼前には、広い敷地をゆったりと使った高いビルが広がっていた。暗い通りで、足元を見つめて暮らすマギーとは異なり、キャリアの眼前には最初から都会の立体的空間が広がっていたというわけである。キャリアはその後、愛人とニューヨークへ逃避行するが、ニューヨークへ近づくに連れて、その大都会ぶりに魅了され、ハドソン川の美しさに心を躍らせ、ハーレムやイーストリバーのボートの様子を心に躍らせる。シカゴ川の小さな流れに船がひしめき合っているのを見て気分が悪くなった頃とは、大きく変化している。またこの様子は、マギーの足元で「黒く死んだような川」が広がっていたこととも対照的である。

キャリアは最終的に、女優として成功し、ブロードウェイ 39 丁目で「キャリア・マデンドとカジノ座劇団」を率いて、高いビルの上から下を見下ろすことのできる人物へと変容するが、彼女が捨てた愛人 Hurstwood は、わずか 15 セントの薄暗い小部屋でガス栓をひねり、死を選ぶ。

小説が現実の世界を映し出す鏡と捉えたとき、マギーの物語は平面的世界のみを映し、彼女の一生は足元を見つめ続けるものであった。一方、キャリアにとっての世界は、空間を高く映し、都市の象徴である高層ビルをも映し出し、それを見上げていた娘は、最終的にはその空間の高いところまで登り詰めた。片やハーストウッドは、最初金銭的に豊かで高いビルから下を見下ろしていたものの、キャリアと人生を共にしたことによって、立場が逆転し、足元のみを見ざるを得ない平面的空間へと押しやられた。

この物語でも、牧歌的自然にあこがれるキャラクターの様子は出てくる。しかしながら、キャリアの過去との決別が決定づけられと、牧歌の様相も減少する。ドライサーは資本主義社会での都市化する社会に対する否定的見方を表していると見る批評家も多いが、人々はこの時代、都市か田園のどちらか一方への選択を求められていたのであり、田園的幻想を描くことが現実の農村生活の厳しさを皮肉に映し出すものであるとするならば、もはや選択は、決まっていたのである。どのようなことがあろうとも、都市を選択せざるを得なかったのである。田園と都市を過去と現実になぞらえた時、現実・都市を選択する人々の姿がそこに見える。

#### 4. まとめにかえて

Williams Dean Howells の *A Hazard of New Fortunes* の中で、バジル・マーチ夫妻は、大都会ニューヨークを当初好意的に捉えることができず、舗装の悪い道路や汚いスラムに目をそむけていた。しかし、ある夜、3 番街から高架鉄道に乗った二人は素晴らしいニューヨークの光景を見下ろし、ここに生きる現実、そしてその先の未来を選択する。

小説が都市の現実を映し出す時、映し出す物の意味、空間と高さの広がる意味を私は重要と考える。世紀転換期から、20 世紀初頭の都市に現れた空間的広がりの中で、その空間を上へと登れる力を持ったものが生き残れることを、この時代の都市小説はあらわしている。キャリアやバジル夫妻がニューヨークの現実を生きることが出来たのは、高いビルや高架鉄道から下を見下ろすことのできる場を獲得したからである。一方、摩天楼を見上げることでできなかったマギーは、ニューヨークの現実も生き抜くことができなかった。高さを伴った都市空間の在り方は、その時代以降のアメリカの都市小説においては、変化が生じる。たとえば、成金のギャツビーが、ニューヨーク郊外に広大な屋敷を構えるように。

19 世紀後半からの鉄道網の発展や車社会の発展は、都市の在り方やその様相を変えることとなった。キャリアがシカゴ到着の手前で眺めた景色、ニューヨークのセントラルステーション駅手間で見た風景。鉄道は確かに人が見ることのできる距離と空間を飛躍的に伸ばし、豊かにしたが、一方で速度の速い列車から、もはや窓から農村の牧歌的風景を見ることはほぼ不可能となった。時代は、大都市の駅到着の手前で列車がスピードを落とすとき、都市の様相をより詳細に見ることができる社会へと、変化しつつあった。都市という現実が、乗客にとって、ぼやけてしか見えない農村を、過去のものとして凌駕してしまったと、ここでも言えるであろう。

#### 引用文献

ジェイコブ・リース『向こう半分の人々の暮らしー19 世紀末ニューヨークの移民下層社会』  
千葉喜久枝訳 創元社 2018